

風狂

第4,5号

風狂の会

詩

父と娘	なべくら ますみ
廃城	出雲 筑三
炎天下	北岡 善寿
春は狂奏曲から	富永 たか子
水影図	長尾 雅樹
所定の場所	高村 昌憲
拳	原 詩夏至
四月	高 裕香

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十九）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

廁についての体験と雑感	神宮 清志
-------------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十一）	高村 昌憲 訳
-----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

とっても良いお天気の 日曜日夕方
公園前のバス停には
家に帰ろうとする少し疲れた家族たち
満足気な親 ぐずる子供

停留所から少し離れ
お互い黙って立っている
父親らしき人物とその娘らしい小学生
バスのドアは閉まった

幸い座れた窓際席から体を斜めにし
外へ手を振る娘の視線は
少しうるんでいるようで
父親は フツ と息を付き目をそらす

娘の手には可愛い紙袋
何を買ってもらったのか
いたわるように大事そうに
窓の外に向け掲げてみせる にっこり笑いながら
ちょっと 振りながら

バスは停留所を後にする
座り直し きりっと正面に目を向ける娘
置いて行かれてしまったような父親
ちょっと手を揚げ
そのやり場に困った間の悪さ

父親はバスの後姿をじっと見ていた
呆然と

廃城が決まり 破壊命令がでた
多くの戦死者をだした天草四郎の乱
再利用されてはまた犠牲がでる

この野心の城を壊すのは骨が折れ
職人の自負心ゆえに想定外だった
石達は数珠の並びを想わせる

やっとポイントの一角を崩したが
次の石がびくともしない
これはどうした事なのか

転石は意外にもそばに来た
うっかりすると元に
舞い戻るかもしれない

しかも驚いたことに
組んであった時より
大きな石塊になっている

お前はちゃんと
仕事をしてきたつもりか
茶紫の石の目が凝視した

大樹を見上げるような石垣
風にのり赤いやぶつばきの
花びらが毛氈のように降りそそぐ

尿 媾合 宝登に 魔羅
朝から暑さに喘ぐ草っ原で
臭いはなくても亀虫よりも臭い
品の悪い言葉がひょいと浮かんだ
言葉自体がいけないのか
「我思う故に我在り」
の己の素性が悪いのか
何れにしてもこの忌まわしい
厳然と在るものから
逃れることのできるものは居るまい
神ならぬ生臭い身なのだから

死んだ魚の眼に似た濁った心が
弁解がましくもう居直っている
連れている犬は熱のこもった草むらに
鼻を突っ込んでしつこく匂いを嗅いだ
むせ返っているのは尿だが
犬畜生に羞恥はない
この俺だって口にこそ出さないが
目の前が原っぱだから
羞恥すべきことを平気で
天から靈感を受けたわけでもないのに
汗ばむ胸に反芻している

いやなに こんなのは愚にもつかない
昔の田舎の子供の言葉遊びだ
遊びではない現実は
間近にだって転がっている
不倫の女が女の子を産んだ
それが成長すると物凄い不良になって
近所の男の子を片っ端から苛めた
それでも年頃になると婿をとり
天文台のある大きな家を作った
これは一体如何なることか

尿 媾合 宝登に魔羅

やっぱりこの世の根源は揺るがない

言葉の記憶も炎天に煮えるのか

とうとう泡立ち弾けるように

おんぼろさんぼろ十万ぼろ

若布の行列 提灯やの看板

東武蔵であったか誰であったか

田舎の死んだ親父が好きだった

浪花節の色褪せた一節が

遠い過去から戻ってくる

久々にピアノを弾く
心做しか
黒ずみ 黄ばんだ鍵盤
年をとったね

寝た子を起こす忙しい音
「揺籠のうた」
あれ！と手を止める

喧噪を逃がれ
星を眺める
最も孤独な男たちを呼び出そう
「山男のうた」を叩く
置き去りの左手は
勝手に動きまわり
あれ！と首を傾げさせる

希望を持たなければよかった
失望の苦しさを味わいたくなければ
感傷的な戯れや
こざかしい技巧が懐かしい若い日

鎌倉のうたを弾く
行く手 行く手に櫻が見え
江の電はあの辺りでかしいで走る
いきなり開けた
七里ヶ浜の清漣に
あなたはよろこんだね

ピアノは訥々とうたう
行き止まりのダメな奴だと笑って

季節のはじまりを
驚奏曲で迎えてしまった

ゆらゆらと水の色を残して
水草の茎が漂ようあたりに
森の景色を写した水面から
光の影がふと静かに揺れる
浮んだ運命の宿図を波紋が歪め
一波 二波 三波
岸辺を目差して生命の襞を描く
月の光を弾いて
柳の花を散らし
小鳥の陰影が滑る
水は透明に反射しながら
明鏡水上の表彰を発光させている
光る面に
かすかな樹木の残映を崩して
ひたひたと迫り来る年月の足音を消す
水底に戯れる水草の私語を聞けば良い

水辺は何処までも蒼く
雑草の群が地表を走り抜ける頃
葦の葉に刻み込まれた水葬の数々

眠っているものはいつも平安とは限らない

沈黙を守りながら
静かに静かに時を待っている

流れる雲が写し出された虚空から
水の輪にはらはらと流れ落ちる雨滴
池の水は自然の謎を溶かして
淡水の味覚が泥土の腐臭を晒すから
舌の先で運命の味をころがして
水泡は水面に浮上する

死の眠りについて野鳥の脱殻を飲んで
骨の形をした死屍累々の水の顔

水底に引き摺り込まれてゆく誘惑の眩暈から
人生の底に澱んだ泥水が吐瀉される

携帯電話が所定の場所になかったので
残りの電気が僅かだったのを思い出す
大急ぎで充電を行う必要があったので
脱いだ上着の内ポケットから探し出す

事物に所定の場所を与えていなければ
携帯電話を紛失したことも分からない
誰からも連絡が無くて孤立していれば
遭難者と同じ日々だったかも知れない

必要な事物の不在に気付かずにいれば
出会いとは無縁の放浪者になるだろう
所定の場所も生活の形式だと気付けば
亡き人の言葉と同じ記憶になるだろう

事物の不在から気付くことは沢山ある
しかし形式の無い思想は疎かなままだ
自分で定めた規則が生活の記憶になる
心から敬う人の面影が映って来るのだ

所定の場所に所定のものが無いことに
気付いた時には自ら充電するのだろう
所定の場所に所定のものが在るように
注視できる精神が思想を生むのだろう

もし振り上げた拳の下ろし方が分からず
そのまま行き暮れてしまっているのなら
友よ 大国よ
あたかもロトの妻みたいに塩の柱に
変えられてしまう前にいっそのこと
その振り上げた拳を腕のつけ根から丸ごと
切り落としてしまうというのはどうだろう
だってイエスも言っているではないか
もしあなたの右の手が罪を犯させるなら
それを切って捨てなさいと そのほうが
五体満足のまま地獄に落ちるより
はるかにましだとは思わないかと
そして そもそも
友よ 正義の徒よ
君のその拳は もともと
そう教えた彼のためにこそ
振り上げられたのではなかったのか
彼の教えを信じないやつら
受け入れないやつらと君が叫ぶ
あの者 この者 そして
おや？ 気づけば
世界中の全ての者たちの頭上に
――君以外の？

それとも
それがあまりに激痛で
到底地上の罪人の取り得る
選択肢ではありえないと言うなら
友よ 信仰者よ
まずはその地上の罪人の一人に
彼の教えを信じないやつら
受け入れないやつらと君が叫ぶ
その最後の一人に
君自身――彼にとって最も大切だと

君が信じるまさにその君自身を
数え入れるところから改めて全てを
組み立て直してみるというのはどうだろう
だってイエスはこうも言っているではないか
私が来たのは義人ではなく
罪人をこそ招くためなのだ
そして羊飼いは
迷わずにいる九十九匹 即ち
彼の教えを信じないやつら
受け入れないやつらと君が叫ぶ
あの者 この者 そして
おや？ 気づけば 君以外の
世界中の全ての者たちを山に残してでも
迷い出たたった一匹の羊 即ち
彼にとっても最も大切だと
君が信じまた事実そうでもあるのに
その当の君自身によって見失われ
数え忘れられたままのその君自身を
捜しに行くのではないかと
まっしぐらに

春を告げる花は梅か桜か
辛い寒さを忘れさせるほどに
四月には、桜の花が見事に咲く。

四月は、特別の月
母の誕生日と命日、そして、次女の誕生日
今年も桜は、裏切ることなく見事に咲いた。

避けることのできない生と死
数多くの出会いと別れ
また、その喜びと哀しみ

めぐる めぐる 季節
めぐる めぐる 運命
また、その私の人生！

桜の花が風で舞い散り
花の川と花道
良き出会いと喜び 幸あれ。



三浦 逸雄 「うづくまるひと」 20号（麻布・油彩）

二〇一〇年十月のある日、パリの街を一人で歩き回っていた。「降りみ降らずみ」といった雨がしっとりと落ちていた。傘を差している人は半分くらい、気温は低い。ルーブル美術館の中庭を通り抜けて、チュイルリー公園を右に見ながらセーヌ河畔に差し掛かったあたりで、それまで我慢していた尿意が猛烈におそってきて一刻の猶予もなくなかった。セーヌ河の堤防に上り、石段を降りて流れの近くに立つと堤防に向かって立ちションに及んだ。あたりに人影はなかった。ふーっと息をつき気分よく放水を続けていると、これがいっこうに終わらない。はるか遠くに見えていた遊覧船が近付き、すぐ背中をのほうを通り過ぎて行く。霧雨にけむるセーヌ河畔で立ちションする東洋人を、船中の観光客たちがいっせいに見ているような気がした。

しかし「恥」とか「罪」の意識はほとんどなかった。「ナーニここは自由の地フランスではないか」という居直りの気分だった。じつはその前日にも同じことをやっていた。このときは堤防の手前の物陰でいたし、フランス通の先輩が側から「見張っててやるよ」と励ましてくれた。それ以外の都市でもしたことはある。イタリア、フランス、トルコ等々。ちょっと面白かったのは、南フランスのアールで、ゴッホの跳ね橋を観に行ったときのことだ。観光バスの運転手はムッシュ・ジェロームという頭のはげた人の良さそうなおじさん、下手なフランス語で話し掛けると丁寧に答えてくれる。ここでトイレ休憩だとしてバスを止められたところが給油所で、トイレは一つしかない。ここへ男女が長蛇の列となった。「あれではいつ終わるか分からない。その辺で立ちションしてもいいか？」とからかうつもりでいった。「立ちション」はむろん身振りだ。するとムッシュ・ジェロームはバスの中のトイレに連れて行って鍵を開けてくれた。バスにトイレがあるとは知らなかった。おそらく同乗していた日本人観光客は、誰も気付いていなかっただろう。そのトイレを使わせてもらったのは、わたし一人だったことを誇らしく感じた。

立ちションで思い出すだに苦しい場面がある。トルコの世界遺産「トロイの遺跡」に行ったときのことだ。紀元前の遺跡に広がる白い大理石の破壊された建物のあと。監視人の人影はなく、どこにも立ち入り禁止の札もなければ、柵もない。三五〇〇年前の城壁が残っていて、水を引いた土管もある。それが一部壊れていて、その破片を拾ってきたが、とがめる人は誰も居なかった。そこである老人が大理石の陰で立ちションに及んだのだ。このときの奥さんの怒り方は凄まじかった。怒りはなかなか治まることを知らず、いつまでもしつこく続いてきりがなかった。

「だって我慢できなかったんだ！」とうとう旦那のヒステリックな声が響いた。なんともいえない深刻劇だった。

日本人は身内に対してことさら厳しい。とりわけ家内は「おっかない」存在である。セーヌ河畔で放水したとき家内同伴でなくてよかった。その数年前のこと、イタリアのフィレンツェでいたずら書きをして問題になった女性が居た。このときもっともイタリア人を驚かせたのは、この女性をバッシングしたのは日本人自身だったという事実にあった。彼らからみると日本人は謎の異人種である。

とにかくヨーロッパの都市にはトイレが少ない。公衆トイレなどさっぱりない。日本なら目立つところに公衆トイレがあり、駅には必ずトイレがあるから安心していられる。しかしヨーロッパ人というのはその必要が日本人に比べると極端に少ない。自宅を出てから帰宅するまで、外で

用を足すことがない人が大部分らしいのだ。日本人はテンション民族といわれ、トイレが近いことでは有名で、彼らに不思議がられている。レストランとかカフェにはトイレがあるけれど、そこには人が居て、チップを支払わなければならない。

チップではなく入場料を取られるところもある。イタリアでもそうだったし、中国でもそうだ。中国の「瀋陽」はかつての「奉天」である。その駅は「瀋陽南」といい、東京駅とそっくりである。満州国を建設したとき、リトル東京を再現しようとしたのであろう。そこに「公廁」と書いた大きな看板を見た。漢字が読めるのが幸い、これは公衆トイレだと分かる。映画館の入口みたいになった狭い通路を通過するとき入場料を取られる。多分三円くらいだったと思う。東京駅にそっくりの立派な駅の「公廁」ならそれに相応しいトイレと思ったら、これが凄いのなんのって。その昔の公衆便所の匂いと同じく、夏のことゆえ強烈だった。もっと凄かったのは、何段かの階段を登ってドブのような流れに跨ぐようになっている。仕切り板はあるがドアはない。溝には常に水が流れていて、誰かが落とした固形物を見ながら用を足すことになる。流れをスムーズにするために傾斜がついている。そのために階段を登って上がるような高さが必要なのだろう。彼らがしゃがんでいて、立って小用をしている者と目の高さが同じになるので、どうしても目が合ってしまう。いまの日本人に落ちていてここで大便が出来る豪傑は居るだろうか。小便をするだけでもかなり難儀だった。

このようなトイレ事情も中国民族の歴史と関係があると思う。今でも農村の一部では、トイレと呼べるようなところがなく、地面にしゃがんで用を足すところがあると聞く。それは数分後には跡形もなく片付いている。放し飼いの豚が処理してくれるのだ。中国の伝統的な生活様式のひとつなのだ。アジア地区の多くに豚が古代から放し飼いで飼われてきた。それが人糞の処理を一手に引き受けてきた。よって瀋陽の公廁のような施設は、彼らからするならばこぶる近代的なものなのだ。日本に豚を飼う習慣が古代より根付いていないから、日本人は大陸から渡来した民族ではないとする説がある。縄文人が弥生人に移行するとき大陸からの民族移動があったとする説に対する反論の論旨のひとつとなっている。日本では人糞を肥料とすることで処理してきた。よって人糞を保存する場所を早くから作ってきた。古事記の中にも、神が糞から生まれたり、尿から生まれたりしている話が出てくる。人糞から多くの実りが生まれたことを象徴した神話である。

中国の大都市の歩道で脱糞したあとを見かけることがあった。犬ではないかと思ったがそうではない。彼らは犬を食用にしているので、まず街で見かけることはない。何しろホームレスの数が日本の比ではない。子供が歩道でしゃがんでいる姿を見たこともある。街の散策というものは日本のように快適ではない。犬を連れて散歩するという風景は、われわれの周辺ではごく当たり前のことだけれど、豊かさの象徴といえるのではないかと気付かされる。

トルコでは日本と同じようにしゃがんで用を足すトイレが多い。どうやら庶民の使うトイレは皆その形らしい。アンカラからイスタンブールまで夜行列車に乗った。その個室には冷蔵庫も洗面台も備え付けで、冷蔵庫の中身はすべてサービスとなっている。かつてのイスタンブール特急のような贅沢さだった。トイレは客車の前後にあったが、様式と和式が交互についていた。変わっていたのは、使用済みの紙を下に捨てずに脇の壺に入れるようになっていたことだ。これは列車の中だけではなく、どこでも同じだった。われわれ日本人には抵抗のある習慣である。これは台湾でも同じである。アジア各地に多いのかもしれない。資源保護ということであろう。とすれ

ば尊重しなければならないだろう。

海外から帰国して、飛行機から富士山を見ると日本に帰ってきたという実感が湧いてくる。そして味噌汁を飲み、その深い味わいに日本人を意識する。そしてトイレに入ると世界一のトイレだと認識する。特にウォシュレットなどという結構なものを使うと、いよいよその感を深くする。最近ではその普及目覚ましいものがあって、公共的なところでも使わせていただくことが出来るようになった。海外から来たタレントがこれを自国に持ち帰る人が多いと聞く。そのはしりはマドンナだったというのが定説である。

このウォシュレットを最初に開発したのは「小糸製作所」だった。そこであのかたちを考案したのは、能面作りに本格的に取り組んでいた外沢照章氏だ。彼は今北海道で能面教室を主宰し、定期的に個展を開いてご当地の名士となりつつある。彼がその開発に携わっていたとき、人のお尻のかたちを研究し女性の協力も仰いだという。女性は手の感覚が優れていて、その微妙なカーブを形成するとき、大いに助かったとっていたのが印象深い。

日本のトイレ事情が急速に進歩して世界一になったのは、経済の急成長にともなったことであつた。それ以前は中国を嗤える状態ではなかった。紙が貴重品で地方の農村では竹べらとか縄で処理していた時代が半世紀ほど前まであり、その経験者は今でもお目にかかれる。終戦直後は紙がなくて、いろいろと工夫したことを思い出す。

敗戦後多くの日本兵がシベリアに抑留された。その日本兵を最も当惑させたのは、トイレに入ったのち手を洗うことが出来ないことと、紙がなかったことだという。紙で排便後の処理が出来ないとなると、大いに困る。捕虜だからこんな待遇になるのかと思つたらそうでもないことを知ることになる。対ドイツ戦で経済的に厳しい状態に陥ったソ連では、トイレの落とし紙を一切生産していなかった。ソ連兵も用便後そのままズボンを持って立ち去っていたという。現今でも紙を使うのは世界的に少数派であつて、紙は今でも贅沢品なのだ。

皇女和宮が中仙道から上京されたときのこと、その行列に五〇人ほどの人夫が交代で担いだ「お飯屋」というものがあつた。これは六畳二間からなる湯殿とトイレである。皇女がトイレに入るときは女官がお供して、紙でぬぐう。皇女なればそのような不浄のことに自ら手を汚すことはしてはならない。皇室におけるこのような仕来たりは明治以後も続いたのであろう。今上天皇ならびに皇室の方々はウォシュレットなどお使いあそばされておられると拝察するが、意外と近々までお供の仕事であつたのかもしれないと推理してみたくなる。付け人のいる相撲取りの中には同じことをしてもらふ関取も居ると聞く。中には自分で後ろまで手が届かない関取も居る。

五〇年ほど前に、福井県武生市郊外のある村に厄介になつた。その家は江戸期に庄屋であつたので武士を泊まらせることがあつた。そのためのトイレが残っていた。畳敷きの六畳くらいの大ききがあつて、その真ん中に便器が取り付けがあつた。部屋を広くしたのは、用を足しつつ襲われたときに刀を抜けるようにしたという。そこでやってみろといわれて、ある朝使ってみた。すると下に谷川が流れていて、自然の水洗トイレとなっているのはいいが、紙を落とすと風が舞い上がってきて紙を浮き上がらせてしまう。それをどう処理したのか聞きそこなつた。情緒よりも落ち着かないことおびただしかつた。

日本人全体が和式トイレから洋式トイレに乗りかえ、ウォシュレットの普及も早かつた。これはおおいに結構なことながら、困つたこともないわけではない。ごく最近のこと、あの四〇〇勝

投手の金田がテレビに登場して、今の若い選手は腰が硬いと苦言を呈した。工藤監督の講演会に行ったら、今の少年野球を指導していて股関節の硬いことに気付くと述べていた。それは何故か。工藤氏は和式トイレを使わなくなったからだと指摘した。この指摘の鋭さに大いに感心した。トイレばかりでなく、和室も使わなくなった。このことが股関節の柔軟性を失わせたにちがいない。長年続けてきた和室での生活、これによって出来上がっていた体が急に洋室で暮らすようになって、腰の衰えを一挙に進めてしまったとなるとこれは案外由々しい問題かもしれない。

人の体の中に多数ある関節、その中で肩関節と股関節が動く範囲がもっとも大きい。ここの柔軟性を失うと支障が大きい。齢を取る前から肩・腰の痛みを訴える人が多くなってきた。少年時から柔軟性を失っていては、齢を取ったときどうなるのだろうか。

還暦に近付いた頃、あるとき蹲踞の姿勢が取れなくなっていることに気付いてショックを受けた。いつの間にかその姿勢が取れないほどに腰が硬くなっていたのだ。しゃがむという姿勢をとることが日常的になくなってから久しかった。以来毎日しゃがむ稽古に励んで今ではなんとか可能になった。

女性なら和式トイレを使っていれば、一日に何度も蹲踞の姿勢をとることになる。それが楽になったのはめでたかったが、思わぬ不遇を招いてしまったことになる。便利になるということは、体を怠けさせることにつながる。それが肉体の機能低下をもたらす。高度の機械化と合理化は野性味を失わせ、逞しさを奪う。それでも後戻りは出来ない。（了）

第九章

七月に出発の命令がありました。少なくとも滑稽で小さな事件が幾つかありました。技術者のデュジャルダン、私たちの道具や器具や電話線や梯子を運ぶために、秣用の車を整備させられました。というのも私たちには可笑しい位に小さくて、馬に引かせる軍用運搬車しかなかったからです。我々の立派な人物であるRという名の司令官は、自動車工場の出身者で、私たちの乗務員が正規の者でないことを指摘していました。全員を降ろして、殆ど全員を置いて行かなければなりません。しかし彼は大変冷静に、私たちの大変に良く整備された自動車の中に彼のトランクと荷物を入れさせました。そうなのです。しかし夜には信じられない程の泥が馬たちの腹にまで届く中で、森を通り抜ける時には飛ぶ様な私たちの自動車は、夜も泥も二つとも解消されていました。この同じ日の夜に、揺れによって私たちは二、三人が、軍用運搬車からこの泥にまさに放り出されました。そこでは歩くよりも泳いだのです。私はそこで大変に貴重な花飾りの小包を紛失しました。しかし、そのことを長く考えませんでした。明け方には、私たちは何処にでもある様な大きな村に居りました。そこでは女性たちや惣菜屋などが見られましたが、それらは忘れていたものです。私は頭がおかしくなりました。半乾きの泥しか付いていない大外套で何処にでも移動しました。そして、二〇人分の食料を何でも購入しました。トゥールの周りの村から村へ、私たちは何時も夜に歩いて日中に眠り、とても文明人とは言えませんでした。ついに列車の中に居りました。我々の泥だらけの大砲は、子供たちを驚嘆させました。そして、私たちと言えれば平然としてまるで英雄の様でした。一人ひとりが順番に家畜用列車のドアの処で、足をだらんと垂らして座っていました。馬たちは良く手入れが行き届いていて世話が行き届いていました。というのも旅は馬たちを滅入らせるからです。この旅は長く続き、誰も到着を急ぎませんでした。私たちは何処へ行くことになったのでしょうか。将校たち自身も知りませんでした。私はジョアンヴィルの町と同じ様に、駅名を幾つも読みました。しかし、ジョアンヴィルは何処に悪魔がいるのでしょうか。私は今でも良く分かりません。

私たちはシャンパーニュへ行きました。そして、それがはっきりした時、言葉にして言う様になりました。新たに素晴らしい攻勢が行われ、そこでは騎兵隊が戦線を突破したと言われていました。これは信じる事が可能です。それなのに何故信じないのでしょうか。戦場にはあらゆる可能性があります。でも、事実はそれが本当でなかったのです。それから間もなく私たちは、それを知る様になりました。事実は眼の前にあると言えます。こうして私たちはサン＝イレーヌで降りました。納屋の中で沢山の人々の間で泊まりました。哀れなこの地方のふくれ上がったヴァーヴル平原は何という変化でしょう。白亜の粉末で喉が渇きました。この年の秋は温かでした。私は車付きの調理台で、固まっていた熱いスープを一日で、恐らく小瓶で十本飲んだことを思い出します。人々は喉が渇いていましたが、スープを拒みました。ところが、ついに私をお手本にして見習いました。Cはその後で、私が与えた忍従としてのこのお手本に大変びっくりした、と私に言いました。しかし、この行為には少しも美德の欠片もありませんでした。喉が渇いている時のスープのことは、楽しみとは何の関係も無いのを私は知っていましたし、分かっていることです。

私たちは新しいことにびっくりしました。パリのバスは肉を運搬し、トラックは歩兵たちを輸送しました。ゆったりした頭巾付き外套を着た騎兵たちは、素晴らしい馬に乗って走っていました。私たちは、背中に大きな白い正方形を縫い付けて着ている多数の歩兵たちも見ました。それは少しも楽しいものではありませんでした。襲撃の波はその様に、上方へ発砲するのに少しも危険を冒さない砲兵隊にも痕跡を留めていました。しかし私たちが良く知ったのは、私たちがそこで正確に発砲するためには、発砲したい場所を知るだけでは十分でないということです。背中に印を付けた人々は、決して長く考えている様に見えませんでした。彼らは居酒屋から居酒屋へ行きましたが、機械的に動き回っている様に見えました。大砲は轟いていましたが、未だ余りに遠いのです。無駄な日々でした。追跡のための武器が既に先に進んでいなかったのを私たちは既に予感しましたし、それは本当でした。私たちは自分に、先に立つのを熱望することを感じませんでした。その反対に、立ち止まった群衆の背後にいましたし、見るためには無駄でも背伸びをしているのです。以上のことから無気力が、我々の軍隊の不活動を大変上手に整えました。お金の代わりに欲しかったものが見付かったのです。私たちは小さな流れで体を洗いました。草が兩岸で新鮮でした。この数日間には上官たちも、私たちが平静にした儘でした。白亜が私たちの泥をきれいにしてくれました。背中にしるしを付けた歩兵たちを見た時には、少しは幸せになります。

とうとう私たちは、夜間の進路を歩き出しました。幾つかの松の木立がある平地で、シャーロンの野营地でした。しかし私たちは全く何も知りませんでした。十字路では何時もの様に停止して、果てしない車の列が続いていました。その時には土手でも眠りました。霧が出て来ました。それで私は朝まで夢見る気がしていましたし、或る時は軍用運搬車の上でうとうとしたり、又或る時はその横を歩きました。T大尉が軍用運搬車の上に眠りに来たのを私は思い出します。夜更けに、ぐらぐらして不安定な車の梁に沿って水の流れがあり、騒ぎになりました。幾らか経ってから私は、私たちが小川を二回横切った様な気がしました。私たちが霧の中で円を描いて回っていたことは十分にあり得ることです。斥候に出されたゴンティエは、自分の判断で塹壕の中へ降りて、朝になるまで出て来ませんでした。大きな大砲が発砲しました。しかし、どんな指揮をしても孤立していました。この世界では連結具と共に軍用運搬車も大きく見え、時折、火が付けられた蠟燭は曇った洞窟の様に照らしていました。しかし目覚めは晴れやかでした。世界は僅かな時間で洗われました。私たちは松の木で囲まれて大変に穏やかな広い斜面に出ました。私たちの上方では、一五五ミリ砲が大音響で発砲していました。前方ではもっと鈍い音でその土地全体が振動していました。殆ど全員がモロッコ人である軽傷者たちの列が戻り始めました。我が軍の医者が通過する時には、彼らの或る人々のことを考えました。私たちの中に顔色が緑色に変わった人々を私は見ました。彼らは通常、馬たちと生活していました。私はその時、書物が語っている砲撃の恐怖を理解しました。しかし、その全てを体験した訳ではありませんでした。私たちの仲間は戦争の危険に良く慣れている様でした。私はと云えば、恐怖を感じることも無く、跳び上がることもありません。私はアウステルリッツ(1)もその叙事詩も理解しました。私は事前の策として、放置されていた何百メートルもの電話線を巻き付けました。その後で、松の枝で出来たベッドで長く眠りました。あらゆる活動が静まりました。そして再び私たちは大変良く休息を味わいました。私たちはそれを肉体にも感じました。この大きな傾向は、メーストル(2)が言う様に勝利に傾いている様に思いました。勿論、私たちは最早滑る様には進みませんでした。行動

中の軍隊は局面上のどんな伝言でも受取って、その様な原因で進んだり、停止したり、後退するのだと私は推測しています。事實は、最後の総攻撃が動けなくされたのです。私たちの砲台は松の木の下に隠されました。私たちの眼の前では馬たちの一寸した屠殺があり、ビフテキ用の馬肉になりました。私はその時に、白馬の肉は食用にならないことを知りました。本当でしょうか。それ以来、そのことに関して誰も私に教えてくれませんでした。誰もが溝の中や、松の枝の上や下で眠りました。私たちが占領しなければならなかった陣地も、余りに居心地が悪いと言われていました。恐ろしい場所としてスーアンのことが語られました。参謀たちは退きました。私たちの馬たちは銃後に移動しました。司令官は失声に苦しみました。そのことは私たちの冷めた気力を大変良く表しました。その点について私たちの班には電話連絡網を用意するために、スーアンへ行く任務がありました。そして、軍用運搬車の上で第六支隊となりましたが、常に平然として私たちと再会することを至上の喜びとしていたジャンナンによって導かれました。三十分後に、私たちは火山の様な土地におりましたが、何度も描かれた月の様な土地で本当に筆舌に尽くせない処です。乾いた粘土に対して、巨人の彫刻家が親指で打ち付けた様な土地です。あるいは灰色の薄片になった雀蜂の巣の様な外観を呈しています。ところが中でも身を潜めている砲兵が見る処では、その土地は避難所にはこと欠きませんでした。そこは穴と褶曲だらけでしたし、爆発しなかった榴弾と砲弾が多量にありました。私たちがスーアンで会って従属した見知らぬ少佐は、安全のために夜警をすることを勧めました。彼は間違っていないでして。しかし、私たちは自分たちの活動に関して自由でしたし、既に養成されていました。私たちに不幸なことは何も起こりませんでしたし、私たちは行動しました。他の人たちは単に電話線を運ぶだけでしたが、ゴンティエと私は大変な働きをしたのです。それというのも、でこぼこの土地を通過していた電話線が多量に切断されていたからです。困難なのは、同一の電話線の両端を確保することでした。私たちの懐中電灯は、この種の発見には大変良く役立ちました。そして埃だらけになって、疲れ切って、お腹をすかして、喉を渴かして、夜に野営地へ戻る時は、まさに私たちは誇りを持ちました。勿論、私たちは良い待遇を受けました。更に言うと、想像力からの恐怖が私たちを英雄と見做しました。私はテントの下で眠りましたが、それは私にとってこの戦争で最初で最後でした。

翌日、やっと設置された砲台の後ろで私たちは、ドイツ軍が削って造った白亜で一杯の避難所で電話を掛けました。そこは松の幹で支えられていて、極めて丈夫に整えられていました。私たちは何の怖れも無かった低い部屋で眠りました。私はアラジンの家を信じました。何故なら支柱の幹は全てが青白く光っていたからです。私たちはこの常夜灯の明かりで、それに関しての二つの不都合がなければ大変良く眠ったことでしょう。一つ目の不都合は、どんなに小さく動いても鳴るピアノの様に、簡易ベッドが鋼鉄製の金網の音を出すことでした。私たちはこの装置に〈消音器〉という渾名を付けました。二つ目の不都合は、まさに私たちを動かすものであり、音楽の様になっていたものです。それは虱でした。私たちがいたシャンパーニュ地方は、虱がたかっている (pouilleux) という言葉が極めて厳密に付けられて表されているのか私は疑っています。というのも虱の群が粉を吹いた様な白っぽい溝を、私は一度ならず発見したからです。それは他の地方では蟻を見ている様なものなのです。虱はそこではどんな軍隊にも勝つのでしょうか。私には分かりません。

シャンパーニュ地方にいた一ヶ月間に、私は沢山外出しました。ゴンティエの服は何よりも穴

だらけになっていました。そして、私と離れば殺されるだろうと思い込んでいました。この予感怖がらせました。それと私の上等兵という仕事は、受話器を持って長い時間番をする仕事と両立しませんでした。一度ならず私は実行するのが困難な命令を最高権力者から受け取りました。この最高権力者は、一種の新しい人物であるJ中尉に代表されていましたが、彼は司令官を補佐していて、電話や無線通信のアンテナやそれらに関連したものに関しての特別な任務を帯びていました。私はボーモンにいた終わり頃に、優雅でおべっか使いの印象があり、殆ど何時も優しそうで礼儀正しいこの人物が到着したのを見ましたが、彼は新式の武器で養成されていて、自分の仕事のことを考えていましたし、大変上手に命令を識別していました。最初は注意しませんでした。ドイツ軍の公式声明を私は部下として翻訳した時から不幸が始まりました。彼は良き生徒として振る舞っていましたが、大変上手に言い直す術を知っていて、私に訳し直させました。彼のやり方は我が軍のために何時も何らかの仕事を探すことにありましたし、下士官たちを仲介者として、特に上等兵を仲介者としてしか決して命令しないことにありました。私には部屋を換気することしか求めなかったと理解しています。私が言えるのは、この人物はさも優しそうですが、私には戦争の毒を盛ったのです。

私は最も不愉快で、そして最も危険であるが確かな方法による挿話で、この話を終わりにしたいと思います。しかし、その危険は単に私自身から来ていました。或る日の午後、私たちは飛行機での砲撃の修正に参加しました。私たちは任務を弁えていました。無線技士はこの分野の専門家でした。彼は飛行機から受けた命令を砲台へ伝達することに関わっていました。そして、その返事として地上に色々な方法で広げられている標識によって、飛行機に話すことにも関わっていました。J中尉がいなくても、全てはきちんと行われていました。でも、中尉は全てを非難して電話の傍で叫んでいましたが、それは電話の相手への命令と見做されました。そして砲台は非常に早く発砲しました。飛行士は監視するに有利な居場所を発見した時にしか発砲を命じません。要するに、この作戦を導く習慣があった私は、猛烈な言葉を言う中尉を振り払いました。彼はそれを大変に気分悪く取って、謝罪を求めました。私はしびしび謝罪しましたが、彼はそれで満足しました。しかし謝罪の時には直前に、私は彼に跳びかかることも考えました。ところが直ぐに分かりました。何故なら友人のCが信号兵の様にそこにいたのです。それから丁度その時に私は、他人の様に冷静に振る舞いました。そうして何も書き付けずに済んでから、その後私に言いました、「あなたがまさに中尉を掴もうとした時、そして電話線しか持っていなかった時、あなたに反対する証人は一人もいなかっただろうと私は心で思っていました」。そこからお分かりになることは、私が一兵卒に止まっていて、彼らの一員と見做されていたことです。しかし私は特に、常に敵の位置を監視することに気を付けた奴隷の考えを引用したかったのです。この奴隷の考えは、私には自然の様に見えますし、軍隊の全ての兵士たちにとってもその様に見えますので、もしも彼らが私の本を読んだなら、私たちの良き人々にとっては悲しいものになるでしょう。主人と奴隷の間の戦争は、決して相手の戦争を縁取ることを止めずに全ての動きを伴うことも止めないのですが、人は無知でいたいのです。それは余りに素早い怒りと、上官たちの極端な厳格さを説明していることに注意して下さい。私は少しも非難している訳ではありません。そして確かに、もしも私が将軍であったなら、そしてもしもこの仕事を行うことを心に誓ったなら、私は人間として如何なる憐憫も持たないに違いありません。私は人が戦争を望んでいることを認めます。しかし、それは人が望んでいることであることも知らなければなりません。

以下は如何にしてそれから逃れたかです。私はその点について多くの事例を持っています。しかし一つだけで十分でしょう。私たちは殆ど穴の中に落ち着いていませんでした。J中尉が班と共に直ぐに出発して、私たちの前方にいる七五分隊まで電話線を引くことを私に命令した時、籠の上に鏡を乗せて私はひげを剃っていました。彼は、私に方向を示しました。つまり一キロメートル先への一種の出撃です。何か怖いものがあります。しかし私には既に、或る歩兵に言わせていた英知が少しはありました。「最早怖くはない。最早心配だけしかない」。一キロメートル先に心配は少しもありません。私は班を集合させました。私たちはこうして出発しました。前線は一進一退でした。私は帰りに酷く興奮した人に出会いました。「どうしていたのですか。この砲撃が少しも止まないのを見て、私はあなたを呼び戻すために、待っている様にあなたに言うために人を送ったが、彼はあなたを発見しなかったのだ」。私は、英雄の飾り気の無さでそれに答えました。私は、その人が私たちを十分に探さなかったのだと思います。そして、私たちの眼の前の石が転がり始めると、直ぐに穴の中に潜り込み、嵐が終わるのを待ちました。その後で、私たちは機敏に任務を遂行しました。榴弾が蒔かれた地面での夜の帰還は、危険だったかも知れませんでした。詩人が言っている様に、後は神に任せて私たちは足跡の後に続きました。これらの遠征は悲しい考えを除外した一種の興奮によって支えられていましたが、慎重さには抜かりありませんでした。

水不足は支障になりました。私の短靴と同じ位に黒いに違いなかったゴンティエの耳を私は見ました。それは髪の毛の分け目にも沢山付いていましたが、午前中に私は彼の分け目の上に水をぽたぽた垂らしました。水は沢山ありました。スーアンには大変に優秀なポンプが残されていました。しかし、その場所は不衛生でしたし、道も同じでした。一人ひとりがそこへ順番に行き、水の価値を知りました。私はその時、光輝いているが剥げ落ち易いワニスを両手に見ましたが、それは鳥の羽と同じ様に未開の人間の肌には自然でした。

私は或る日、避難所そのものが非常に怖くなり、決断出来なくなりました。地面の方が掘られて、白亜は籠で再び高くなりました。私は最も楽な場所において、籠を受け取っては周囲にひっくり返しながらか、土手に座っていました。大変に遠くでは砲弾が大きな音を立てて唸っていました。そしてあちらこちらで、家の様に高くなった地面から砲火が上がっているのが見えました。湧き出た水に似ていました。ところがこの砲弾が私の方へ移動して来て、非常に近くなって私は心配する程になりましたが、蛙の様に穴へ飛び込む程ではありませんでした。砲弾のひゅうひゅうという音が聞こえる度に、私の耳には子供の時の恐ろしい鞭打ちが始まった様に聞こえました。私は極度に怖く感じましたが、大変に自然でした。しかし私は穴に飛び込むことが正しいと判断しませんでした。そして実際に、そこに居りませんでした。不決断が最も大きな誤りの一つです。

私は歩兵たちへの二度の遠征のことを思い出しています。しかし、それは白亜を掘る仕事よりも危険です。でも、恐らく私には少しも怖くありませんでした。私たちの班は、七五分隊の連中があの高い処で受け入れずにいたために、歩兵隊との関係で特別な任務を帯びていました。もしも参戦した人々のために書くとするなら、その理由を言うには及びません。しかし、その他の人々は七五分隊が発砲にずれがあった結果、知って置かねばならないことですが、我が軍の最前線に撃ったことを知らなければなりません。私は夜番をしていて不幸な砲撃を行った七五分隊の司令官と、我々の九五分隊の司令官との対談を語るために、私の話は中断します。前者の司令官は

、後者の司令官を急がせました。前者は作戦区の長官として権威があつて、私たちの塹壕に極めて近いドイツ軍の塹壕への砲撃を急がせました。しかし我々の司令官は避け難い砲撃とのずれを引き合いに出して、結局は従わずに反対しました。私たちは、七五分隊の人物が九五分隊に同じ誤りを与え様としているとの考えを自然に持ちました。この一兵卒は皮肉なのです。いずれにせよ、歩兵たちの隠すことの無い怒りによって、私たちは前方の全ての監視所に気を配りました。かくして或る朝、私たちはル・ボア＝ギロームという名の土地へ行きました。私は、モロッコ人の顔をして瘦せていて脅迫的ですが、真の軍人の顔をしている人々と知り合いになりました。私は初めて七七ミリ砲のドイツ軍の大砲を見ましたが、我が軍の七五ミリ砲よりも短くてどっしりしていました。そして私は、改めて火薬の違いのことを考えました。だが、考えは中断されました。何故なら屢々脇に寄らなければならなかったからです。信じられない位に沢山の馬が脇を歩いて行きました。百頭以下かそれ以上か私は言えません。その匂いは恐ろしい位でした。これらの馬たちが砲兵隊のものか、騎兵隊のものか私には少しも分かりませんでした。しかし、そこは有名な突破作戦の領域だったのです。私たちが電話を設置した地点は地面が少し斜面になっていた背後で、何体もの死体が点在していて、少し登って行く平原が始まっていました。そうして巻いてある電話線を伸ばしながら帰って来る時、私はあらゆる場所で幾つもの死体を発見しましたが、それらは黒人の様に見えました。その点については何時も見間違えます。ゴンティエはそのことを私に教えますが、私はそれらの死体を専ら見ない様にしていました。それにその日の午前中、その場所は大変静かでした。少し後になると、もっと危険になりましたが、全体的に私は一種の停止した戦争を想像しました。我々の砲台は密集してあったことに私は気付きました。ヴェルダンにあってさえも私には最良には見えませんでした。

別の出撃の時には、私たちは敵の近くにまで連れて行かれました。その場所は、P 15と名付けていて、ギリシアの港町ナバリノの有名な農家以上に位置づけられていました。私たちは殆ど掘ることなく、一本の溝に従って行きました。そして、朝の休戦状態を利用しました。破壊された大地は形を成していませんでした。撃墜された飛行機が私たちの道を示していました。あちらこちらで情報を与える人が居りました。長い行軍の後で私たちは一種の茂みに到着しましたが、そこでは溝をもう少し掘りました。余り堅固ではありませんが、大尉の避難所もありました。そこには私たちに案内人が居りましたが、彼はまさに不可欠でした。というのも塹壕は曲がっていて、最早何処に敵がいるのかも分からないで戻って来て仕舞ったからです。結局のところ、塹壕は曲がりくねっていて小石だらけで少しも深くなく、小さな土手で守られていました。私は最初に燻製ニシンを焼いていた歩兵を見ましたが、煙には気を留めていませんでした。そして次に、手に銃を持って土手の上で待ち伏せしていた伍長を見ました。彼は発射しました。そして、シャベルが右から左へ、左から右へ振られました。これは弾丸が目標に当たらなかったことを意味する一般的なサインです。私はシャベル以外には敵を見ませんでした。これはからかう行為だったのです。今では信じ難い様に私には思われます。この話は捏造したものではありません。次に警報の叫び声がありました。私はこの叫び声の意味が分かりませんでした。皆と同じ様に直ぐに横になりました。一発の榴弾が爆発しました。七五ミリ砲の一斉砲撃が起り、更に一層私は怖くなりました。私たちの前方や、極めて近い処で幾つもの砲弾が破裂しました。我々の狙撃兵たちも恐らく敵の塹壕を撃つ様に命じられました。彼らは出来る限りの注意を払っていても、私たちの塹壕を撃つことも良くあり得ました。より一層賢明なドイツ軍の砲兵隊は発砲を止めま

した。私たちは電話線を伸ばしながら、素早く非衛生的なこの地域を立ち去りました。私たちは溝に沿って進みましたが、我が軍の砲兵中隊が何かに応戦して大きな障害物を突然に破裂した時、瞬間的に機関銃手に追跡されました。大地が振動して、がたがた揺れる二輪馬車の様に私たちに衝撃を与えました。ゴンティエと私は蹲った儘で溝の曲がり角にいました。ゴンティエは野兎の様に飛び出ようとしていましたが、私は動かないでいるのを鉄則と見做して固く彼を押えました。但し、私は松笠の形をした儘の榴弾の不発弾が私たちから二メートル離れた処で発見しましたので、私はもう少し遠くへ行くことに同意しました。そして、そこでも私は若い仲間を再び押えました。もっとも彼は動揺していて、自分の力を直ぐに使い果たして仕舞いました。彼は騒音の中でも眠って仕舞いました。私は大して考えることも無く、パイプを吸っていました。この時の時間は長いものでした。我が軍の右側ではタールへの攻撃があり、我々はそれに続くのを知っていましたので、騒動の元になっていました。雨が止んだ様にして砲撃が止まりました。私たちは、二人の仲間が別の隠れ場を出るのを見ました。そこで改めて私たちは、電話線を伸ばして砲兵隊の領域に接近させました。私たちの電話線を、もう一つの電話線に接続させる前に私たちには更に困難なことがありました。電話線が纏れて仕舞ったのです。忍耐がありませんでした。間隔を置いて大きな砲弾が落下して来たのです。しかし壮年期の人間の考えから、私はどんな潰走も中断しました。「何処へ逃げ出すのか。私たちはここよりも良い処があるのだろうか」。仕事は終わりになり、私たちは又勇気も無くなっていました。そして、ひゅうひゅうという音を聞く度に身を横に投げ出して、兎の様に走りました。私は決して最善に走りませんでした。私たちと一緒に同行した二人の部下が、ゴンティエの報告に基づいて戦時勲章を手にししました。私たちに関しては、私たちが私たち自身を推薦するのでなければ、まさに決して手にすることは出来ませんでした。勿論、それは私たちには殆ど重要なことではありませんでした。しかしながらその後、私たちは二人共勲章を手にししましたが、彼は将校として、私は志願兵という曖昧な肩書として手にしました。表彰とは常に名誉なものですが、私の友人の飛行士が言う様に、どんな表彰も最も貧しくてつまらないものであり、あらゆるものの中で最も単純なものに値するでしょう。時々には軍隊の新聞も読んでみるものです。「忠誠を尽くした軍人です。与えられた命令の実行に何時も多くの勇気と良心を示したためである。七回負傷した」。同じ飛行士は従って自由な人間のことも明らかにしていました。「彼は勲章を授けずに背広を着ている人物です」。結局、権威が軍隊を打ち倒していたのです。これらの考えが、もし彼らの立場にもあったなら、ここに居りません。これらの考えは終戦後に生まれたものです。当時、そのことを私たちはそんなにも長く考えませんでした。一人ひとり自分の体の痒い処を搔いていましたし、パスカルが言っている様に、そのことが魂の全てを支配しているのです。（完）

(1) アウステルリッツは、ナポレオンがロシア・オーストリア連合軍を一八〇五年に破った場所である。

(2) メーストル（一七五三～一八二一）は、政治家・作家でフランス革命に反対し、王政の維持と教皇の絶対権を主張した。

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（

評論部門)。二〇一二年から電子書籍（パブ）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

富永 たか子（とみなが たかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

②『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。（以上）

読者からのコメント（第44号）

アラン『大戦の思い出』（十）：ゴンティエ上官のもとで、電話網技術者になったアランの体験が綴られていてとても知り得ない、専門的に大変な任務だったことが分かりました。全員死んだと思われていたのに、最良の素晴らしい夜会だったことに救われました。

狂気について考える：狂気について、知らないことばかり教えていただきました。精神病院を全廃することになったイタリアのことも。真っ正直な人が病んでいるように思いますが・・・

三浦逸雄の世界（二十八）「イチョウの木のある風景」：空に、何か深いものを感じました。

夜盲症：何か幽霊のようなものを感じました。松井冬子の画を、このように表現されるのに驚いています。

まっとうな道：そういう変な男性がいますね。奥様の様子が見えるようです。でも、なべくらさまの、「すみませ〜ん」の心には、拍手してしまいました。

孤独もまた楽しいぜ：新婚早々からおしあわせ。六十余年の充足された人生。よかったですね。奥様が入院されてお寂しいでしょうに・・・。わたしも、自分のことが出来なくなったら入院するつもりでいます。

聖夜：楽しく拝見しました。

上井：久々に倉吉駅を降りると、町は都市化され、地名も変わって・・・北岡様の心のなかの上井は、きっと昔の懐かしい風景だったのだと思いました。

ほんのいたずら心：身近に老いを感じます。妻を泣かせた夫が病む妻に、まるで人が変わったように優しく尽くしたという話を聞いたことがあります。わたしも最終連のように逝きたいと思っています。

愛国心：冬季オリンピックの勝敗には、一喜一憂しました。人々の興奮歓喜は、美しいですが、本当の愛国心とは、最終連にあると思いました。

私の還暦の日：還暦おめでとうございます。30年もの教師生活お疲れさまでした。数えきれない子供達には、きっと良い思い出に残っていることでしょうね。それにしても、お怒りもつとも思いました。(完)

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第45号

2018年4月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/121104>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121104>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト